帰国後の英語教育のチョイス

―― 日本の学校での英語教育：小学校から留学まで ――

INFOE（海外子女教育情報センター） 代表

松本　輝彦

「がんばって身につけた英語力を、帰国後も伸ばしてやりたい」は、保護者の切なる願いです。
日本の学校が提供している英語の教育、さらに留学へのプログラムの簡単な紹介です。

小学校の英語

2011 年 4 月から日本の小学校 5・6 年で英語が必修になります。 その準備のための英語の授業が、 この 4 月から日本全国の公立小学校の 98% で実施されています。（本誌 23 ページ参照）

原則的に週 1 回だけの小学校の英語の授業は、「聞く話す」活動を中心として、 英語や外国人に馴染ませ、 国際理解教育の基礎を作るのが目的です。

具体的な指導内容や方法は、 これから明らかになっていくと思われますが、 アルファベット程度は別としても「読み書きは中学で」というのが基本的な考え方です。

公立校の英語

文部科学省の現行指導要領によると、 標準的な英語の時間数（一コマ 50 分）は、 中学で週 3 コマ、 高校 1 年で 5 コマとなっています。

中学での授業時間数は、 ほぼ固定されています。

高校では、 学校ごとの時間割編成が可能で科目選択の自由もあるので、 英語のコマ数を増やすことも可能です。 しかし、 他の教科の時間数とのバランスもあるので、 私立校に比べると英語の時間数や指導内容も少ないのが一般的です。

英語指導に熱心な学校

大学進学に力を入れている私立の学校の多くでは、 国語・数学と並んで英語の授業時間数を増やしています。「英語力の高い受験生は大学入試で有利」がその理由です。

それをさらに進めて、「英語指導に熱心な学校も多くあります。 授業コマ数を 8 時間に増やしたり、 ネイティブの英語教員の授業を行うなどが、 その特徴です。

授業内容の大枠は学習指導要領に従う必要がありますが、具体的な授業は学校により大きな違いがあるので、 学校選びに当たっては注意が必要です。 例えば、「ネイティブ教員がいます」という学校でも、 生徒一人ひとりが週何コマの授業をその先生達に指導してもらえるのか？ また、 その先生が担当するのは 英会話だけか？ Reading・Writing は？ などをしっかり調べる必要があります。

イマージョン・プログラム

イマージョンとは英語の「immerse（浸す）」が語源で、「その言語に浸りきって習得する」という意味です。

イマージョン・プログラム（IP）では、「英語」ではなく「英語で他教科も」 勉強しながら言葉を学んでいきます。「英語のクラス」を英語がネイティブの先生から学ぶのは特に珍しいことではないため、 あえてイマージョンとは呼びません。

日本の学校の IP では、 音楽や美術など実技系のクラスを英語で教える学校が増えてきています。 特に小学校で、「英語に馴染ませるために」これらのクラスを提供している学校が、私立だけではなく公立の学校でも増えてきました。

それらの学校の多くではイマージョン形式の英語での授業と並行して日本語による授業も行いますので、「バイリンガル」との呼び名を使っている場合もあります。

英語だけでの教育

日本語（国語）以外の全ての教科の授業を英語で行う学校も増えてきました。

インターナショナル・スクール

インターナショナル・スクール（インター）は、 その学校が設立された国に住む外国人の教育を行うために作られた学校です。 日本では、 法律上は小・中・高校の正規の学校とは異なる各種学校として扱われます。

日本には、 英語・フランス語・ドイツ語などの欧米の言葉で教育を行うインターが大都市周辺にあり、 外国人の児童生徒に混じって、 限られた数の日本人の子どもも学んでいます。

また、 近年の日本の国際化（英語）ブームで、 子どもに英語で教育を受けさせたい日本人の保護者が多く、 在校生のほとんどが日本人というインター（和製インター）も現れました。また、 最近は、「教育特区」 制度を利用して、 市町村の支援を受けた公立的なインターも作られています。